

宇陀を駆けた人々

森野賽郭 篇1

薬園の誕生

江戸時代に開設された薬園は、初期には主に幕府開設の薬園、中期には幕府による薬園の拡大と先進的な藩の薬園の設置、中期から後期には後続の諸藩の薬園、私設薬園の開園も相次ぎました。これらの薬園は、薬用・食用などとして役に立つ植物を採集・栽培し、安定して薬や食物を供給すること、産業を興すことなどの目的で開設されました。

江戸時代中期には、医療が一般の民衆にも普及するに伴い、薬の原料となる薬草や薬木（薬草木）の需要が高まってきました。輸入品だけでは、まかないきれないため、8代将軍 徳川吉宗は、山野で薬草を採集する役目の採薬使さいやくしを発足させました。採薬使は、全国各地に点在する幕府領内の薬用資源の調査・採集のため、各地を訪れました。

享保14年（1729）、幕府の採薬使として植村左平次さへいじが伊賀・伊勢・紀伊・大和・山城・河内の採薬調査に訪れた際、同行した人物に森野賽郭もりのさいかくがいました。賽郭は早くから本草ほんそう（薬物に関係した学問）の研究を行っていたことから、幕府の採薬使の採薬調査に同行することができました。この採薬調査に協力した功績により、幕府は賽郭に対し貴重な薬草木6種類を与えました。

賽郭は自ら各地で採取した薬草類とともに、幕府から与えられた薬草木を自宅裏山の畑に植えました。享保17年、宇陀松山にも薬園が誕生しました。

その後も幕府の採薬調査が行われ、賽郭はこれに随行し、採薬の補助につとめました。

